



「森ヶ崎海岸」の成り立ち

「森ヶ崎海岸」は、1947年(昭和22年)、当時19歳の池田名誉会長が作った詩に、後年、曲がつけられて誕生した。

戦後間もない時代の混乱期。それまでの価値観が崩れ去った空虚さの中で、心ある青年たちは「いかに生きるべきか」を真剣に模索していた。東京・大森の森ヶ崎(現在の大田区)に住んでいた若き日の池田名誉会長もまた、友人らと読書会を開き、生きるべき「真実の道」を求め文学や哲学を学び合っていた。

「私は、森ヶ崎の海岸をよく友人と歩いていた。夜の浜は磯の香高く、微風が頬をそつとなでる。打ち寄せる波は、冴えた月光に照らされて、ときに銀色に輝いた」(池田名誉会長)

——月の美しいある夜。海岸で池田青年はその友人の一人と、いかに生きるべきか語り合っていた。友人はキリスト教に入ることを打ち明けた。池田青年は「自分は身体が弱く生活も苦しいが、人々のために貢献できる、堂々たる人生を開こうと思う。お互いに頑張ろう」と語り、手を差し出した。友人はその手を固く握りしめ、二人はほほえみを交わし合って別れた。池田青年が戸田第二代会長と出会い、真実の仏法の信仰の道を歩み出すのは、この直後のことである——。

この友人との語らいを、池田青年は「森ヶ崎海岸」と題する詩にしてノートに記し、その詩は72年(昭和47年)発刊の詩集『青年の譜』に収録された。

作曲者である大田区の男子部員は、この詩集を読むと、「森ヶ崎海岸」の詩の美しさ、ロマンに感動を覚え、メロディーが自然と頭に浮かんできたという。青年部の会合で発表されたこの曲は大好評を博し、ほどなく大田区内の各地で歌われるようになっていった。

73年(昭和48年)4月29日に行なわれた大田区での記念撮影会の折、有志が名誉会長(当時会長)の前ではじめて「森ヶ崎海岸」を披露した。青春の日がよみがえるような美しい調べに、名誉会長も大きな拍手を送り「ありがとう。感動しました。作曲してくださった方を、また、大田の皆さんを讃える意味から、この歌をレコードにしたいと思いますが、いかがでしょうか!」と提案。「森ヶ崎海岸」は日本全国で歌われるようになっていった。

